随想

明治を開いた人々を作り上げたもの

舩橋晴雄

私はこの二十年余り、今日あまり読まれることのない江戸時代の儒学者、歴史家、思想家の本を数多く読んできた。別に系統立っている訳ではなく、好みに委せ、成行きに委せて読んできたのである。藤原惺窩、中江藤樹、熊澤蕃山、荻生徂徠、石田梅岩、本居宣長、海保青陵などの人々の著作である。彼らはそれぞれに浩瀚な仕事をしているから、私は誰一人としてその全著作を読んだ訳ではない。面白そうなものを拾い読み、つまみ食いしているだけである。従って、彼らについてのまとまった書物を著している訳でもない。

時々、「よくそんな暇がありますね」とか、「どこが面白いんですが」とか、半ば呆れた口吻で訊かれることがある。そんな時によく答えるのは、「趣味みたいなもんですから」という言い回わしである。

本当はその面白さや意味合いを詳しく説明したいのだけれども、仲々短時間ではわかってもらえないことは、いやというほど経験してきた。そこで、こんな相手を拒絶するような表現になってしまうのである。

今日の日本人にとって、彼らの文章は英語を読むより理解し難いものとなっているようである。それで本当に良いのだろうかというのが、私がかねてから持っている疑問だ。

まずは慣れ。日頃読み慣れていないことから決定的な拒否反応がある。柔らかい食べ物に慣れ切っているから、固い物を受けつけようとしないのである。本当は噛めば噛むほど味わいのあるものであるにもかかわらず。

少しでもとっかかりを作って読み始めれば、次第に読み易くなるのは何でも同じだ。この点、学校での古文の教育方法にも問題があるような気がする。古文といえば、『源氏物語』や『徒然草』などを小間切れに解釈して教えているようだが、そんな大昔の文章ではなくむしろ時代の下ったものの方が、今日のわれわれの生活実感や問題意識にも即しているし、親しみ易いのである。

二番目に、現代のわれわれには、彼らの有していた文化的な基盤が理解し難くなっているという点が挙げられる。例えば、儒学者は、「義とは何ぞや」とか「誠とは何ぞや」とか議論している訳だが、その議論の前提に『論語』とか『孟子』など中国の古典が踏まえられていることはいうまでもない。ここがわれわれに稀薄となっている点なのである。

私は企業倫理問題を中心としたシンクタンク活動をしているが、企業倫理も倫理の一分野である以上、ここは避けて通れない所だ。倫理とは、「義とは何ぞや」とか「誠とは何ぞや」を考えることだからである。

しかし、今日の多くの日本人にとっては、企業倫理問題とは、コンプライアンス（法令遵守）やコーポレート・ガバナンス（企業統治）の仕組みを作ることでしかないのである。もし本当にそれしか考えられないとしたならば、それは民族としての文化的基盤を喪失しているともいえるのである。

同じことは他のことでもあるだろう。

例えば有名な龍安寺の石庭がある。これを一瞥して終る人と、何度見ても見飽きない人とがいる。この差はどこから来るのだろうか。この庭は自然に石が露出している訳ではない。作庭者の思想に従って然るべく配置されたものである。庭を見る者がそこに何かを感じるとしたら、それは作庭者の思想の一部であるだろう。その宇宙観、自然観、山水観、人間観といったもののどこかに反響するものがあるのだ。

このような場によく、作庭者は誰でその思想はどういうもので、従ってこの場所は何を表わしたものだという類いの「解説」が行われることがあるが、無用のことだと思う。

人の眼を借りるよりも、自らの全身で作庭者の思想にぶつかっていくべきだ。そのことの方が実りある対決になるに違いない。そして、何ものかを把んだ後ならば、「解説」なるものを聞いてもいいだろう。

私にとって古人の著作は、この龍安寺の石庭のようなものなのである。著者と直かにぶつかってそこから何かを得ようとするのだ。相手は自分より何百倍、何万倍と

力があるから、何度ぶつかっても飽きることがない。時に天龍寺に行く、あるいは醍醐寺に行く。するとそれぞれの持ち味の差もわかるし、自分に何が足りないかもわかってくる。こんなことを繰り返していると、次第に思想家の姿が朧ろげながら浮かび上ってくるのだ。

現代の日本人が中毒になっているネットや検索の世界では、このような思想の対決を経験することができないであろう。便利なものは所詮便利なものでしかなく、そこで自らを鍛え上げることはできまい。

明治維新を切り開いた人々、坂本龍馬、西郷隆盛、伊藤博文、福澤諭吉、渋澤栄一といった人々が、何故あれだけの仕事を成し得たのかということを、時に考えることがある。

彼らが持っていた見事なばかりの、世界観・国家観・人間観がどのようにして形成されてきたのか、何故彼らが強大な西欧文明に対して冷静に対応することができたのか。

彼らの人間を作り上げてきたものの多くは、幼少時の教育、特に四書五経や近思録などの書物を中心とした素読と読解の作業であっただろう。この中で、何千年という時間の試練に耐えて生き残ってきた賢者達に、彼らはいつも裸でぶつかり、思想の対決を行って自らを磨いていたのである。もとよりその対決は一人の孤独な作業ではなかった。時に寺小屋で学び、時に父兄の教えを受け、時に同志の輪の中で研鑽する。こういう広い意味での教育が行き届いていたからこそ、自らを磨き上げ、鍛え抜くことができたのだ。

それをひと言でいうならば、伝統の力である。維新を生んだものこそ、この伝統の力だったのである。

翻えって今日はどうだろうか。まだ伝統の力は生き生きと脈打っているだろうか。

明治の赫赫たる成功の裏に失われたものも大きかった。そのひとつが漢籍を学ぶ伝統だろう。かといって今更、四書五経や近思録などを子どもの頃から学ばせようというのも無理な話だろう。せめて日本語を大切にすることが、われわれが後世に残しうる最大の遺産となるだろう。

（シリウス・インスティテュート株式会社 代表取締役、一橋大学大学院国際企業戦略研究科客員教授）